

13 アライグマ捕獲の効果と専用捕獲器の改良

鳥獣害防除担当 小川倫史

(1) ねらい

アライグマは特定外来生物に指定され、全国的に増加傾向となっています。県内でも2016年度以降は、毎年5,000頭以上が捕獲されていますが、捕獲が増加のスピードに追いついていません。原因のひとつとして、タヌキ、ネコなどが誤って捕獲されてしまう“錯誤捕獲”があげられます。そこで、アライグマと錯誤捕獲される動物の行動特性の違いを明らかにし、(有)栄工業と2017年度にアライグマ専用捕獲器を共同開発し、「ラクーンキューブ」の名称で製品化しました。

しかし、利用者から「捕獲したアライグマがエサ収納部を破壊してしまう」との指摘があり、修理費用に加え、稼働率の低下も招くことから、速やかな改善が必要であると考え、改良を行いました。

(2) 研究内容

ア 捕獲器の設置効果

同一地区で4年間捕獲を継続したところ、アライグマの撮影頻度が約3分の1に減少（生息数の低下）しましたが、捕獲頭数は概ね同数となりました（表1）。他の試験区でも捕獲の継続により撮影頻度が低下していることから、捕獲器の継続的な設置が生息数低下に効果があることが実証されました（図1）。また、専用捕獲器の捕獲効率は従来の箱罠に劣らず、アライグマを選択的に捕獲できるため効率的であることも実証できました（図2）。

イ 専用トリガーの改良

旧型ではエサを交換するための蓋が捕獲器の内側にあり、エサの臭いで誘引するための穴が開いていました。このため、捕獲されたアライグマがエサ収納部の蓋を開けて破壊する事例が、2017年1月～2018年6月に捕獲した40事例のうち3事例（7.5%）で発生しました（図3）。

そこで、捕獲器の内側にはエサの臭いを出すための穴だけを残し、エサの交換は捕獲器の外側から行えるように改良しました。（図4、図5）。

2018年7月より改良型の現地実証を行っていますが、2019年11月現在、57頭のアライグマを捕獲し、破壊された事例はありません。

さらに、この改良の結果、エサの交換作業を衛生的かつ安全に行うこともできるようになりました。

(3) 今後に向けて

改良した専用捕獲器は2018年度より販売を開始しています（(有)栄工業と特許出願中）。今後、捕獲器の導入が農作物や生活環境への被害軽減に役立つよう、捕獲場所や捕獲時期について研究を進めていきます。

表 1 アライグマの撮影回数と捕獲頭数 (試験区①)

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計 (頭)
2016年	撮影回数	7	3	46	115	111	70	86	15	6	1	10	0	470
	捕獲頭数	0	0	2	1	8	2	1	2	2	0	0	0	18
2017年	撮影回数	0	3	20	19	46	46	72	13	21	19	18	7	284
	捕獲頭数	0	0	1	2	2	0	11	1	1	0	0	0	18
2018年	撮影回数	1	6	8	10	14	38	26	22	13	23	3	1	165
	捕獲頭数	0	0	0	3	2	2	1	2	0	3	1	0	14
2019年	撮影回数	3	7	15	1	38	23	19	6	20	11	1	0	144
	捕獲頭数	0	1	2	0	3	2	1	0	1	2	0	0	12

※使用捕獲器 2016年：餌釣式・踏板式 2017年：ラクンキューブ®(RC)・餌釣式・踏板式 2018年以降：RC

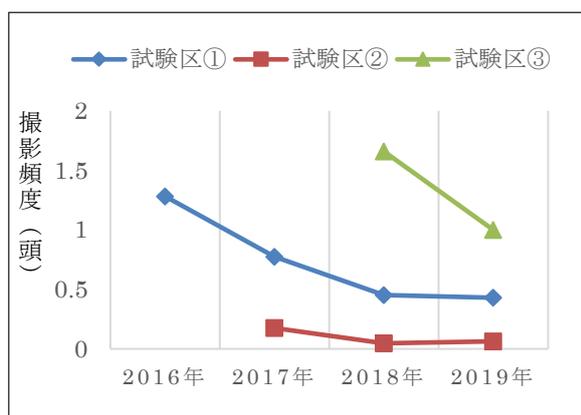


図 1 各試験区のアライグマ撮影頻度 (撮影回数 ÷ 撮影日数)

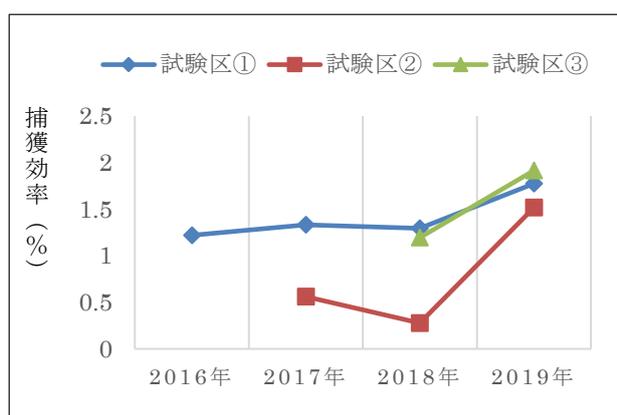


図 2 各試験区の捕獲効率 (捕獲頭数 ÷ (罠設置日数 × 設置数) × 100)



図 3 破壊されたエサ収納部 (改良前)

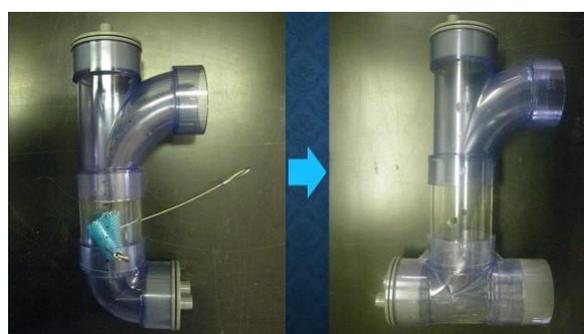


図 4 専用トリガー改良前後



図 5 改良前後での誘引エサの管理作業の改善